

豪雨災害対策 共同研究へ

統合
3国立大学

帯広・小樽・北見

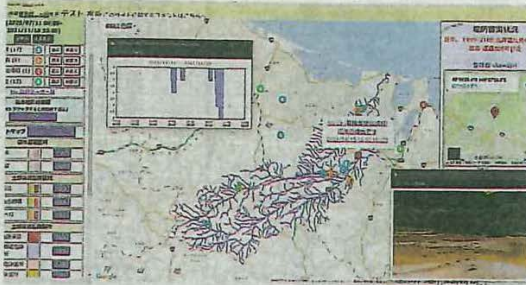
被害状況 LINE で一元化

【北見】来年4月に経営統合する帯広畜産大、小樽商科大、北見工業大は18日、豪雨災害の増加を踏まえ、無料通信アプリLINE（ライン）を使って河川の氾濫や堤防決壊の情報をいち早く入手し、避難誘導などに生かす研究に共同で取り組むと発表した。被災現場の状況や写真を専用システムの地図上で集約し、全国の専門家と共有して防災対策に役立てるのが狙い。（古市優伍）

専用システムは文部科学省が所管し、地球規模の気象データを蓄積・解析する「DIAS（ディアス）」を活用する。北見工大は、災害現場で対応に当たる自治体職員らがLINEを通じて、被災状況や写真をDIASに送ることで、位置情報とともに地図上に反映させるシステムを開発。災害危険箇所を専用カメラで結び、定点監視も行っている。

共同研究では、帯畜大と樽商大がそれぞれノウハウを持つ農業と観光の分野にも対象を拡大。DIASでも対象を拡大。DIASで農地が冠水した際の水の流れをシミュレーションしたり、被災した観光地の復旧工事の方法を情報提供したりして実用化を目指す。

北見工大が18日、オンラインで開いた記者会見で明らかにした。同大の川尻峻三准教授（地盤防災工学）は「北海道の主産業である農業と観光が被災した際、早期復旧につながるようにしたい」と話した。



北見工大が開発した専用システムのテスト画面。被害状況が写真とともにリアルタイムで把握できる（同大提供）

北見工大と樽商大は3月、DIASに蓄積した気象データから、曇気楼や雲海、ダイヤモンドダストなど特異な自然現象の発生を予測する研究グループを発足させた。知床をはじめオホーツク海沿岸に設置した定点カメラを道内全域に広げ、発生日を予測。今後、帯畜大も加わり、地域の観光ツアーに利用するなど観光資源の掘り起こしに役立ててもらおう。

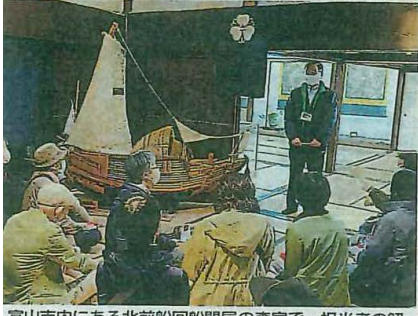
新潟・富山ツアー同行樽商大・高野研究員寄稿

北前船の栄華 息づく北陸

かつて北前船が寄港した新潟、富山両県内を巡るツアー「北前船の歴史をたどる旅〜新潟・富山編〜」（道新観光主催、北海道新聞小樽支社協賛）が10月26〜29日に行われた。参加者44人は新日本海フェリー1号で小樽港を出航し、北海道のルーツに深くかかわる北陸の北前船寄港地を訪れた。全国の北前船寄港地や船主集落を調査研究し、ツアーに案内役として同行した小樽商科大の高野宏康学術研究員に、旅の様子を寄稿してもらった。

新潟港は江戸時代、日本全国屈指の花街となった古海沿岸で最も産物の取り扱町芸妓の伝統を継ぐ日本最大、最大の北前船寄港地であった。北海道との化財となっていた。小樽市の結びつきは密接で、小樽市の龍徳寺金比羅殿（真栄1）には新潟市の船乗り船松馬があり、日本遺産「北前船寄港地・船主集落」の構成文化財となっている。

今回、新潟市内の白山神社の大船絵馬を見学した。縦1・54尺、横0・24尺と巨大な絵馬で、年貢米を北前船で積み出す様子が描かれている。北前船遺産には船絵馬のように各地に共通する遺産と、その地域に特徴的な遺産があり、共に興味深い。新潟市では、北前船の隆盛とともに発展し、



新潟市内の白山神社にある大船絵馬を見学するツアー参加者。新潟港から北前船で年貢米を積み出す様子が描かれている（いずれも高野さん提供）

年貢米積み出しの巨大絵馬 興味深い

社屋となり、日本遺産「炭鉄港」にもつながるストーリーを持つ。

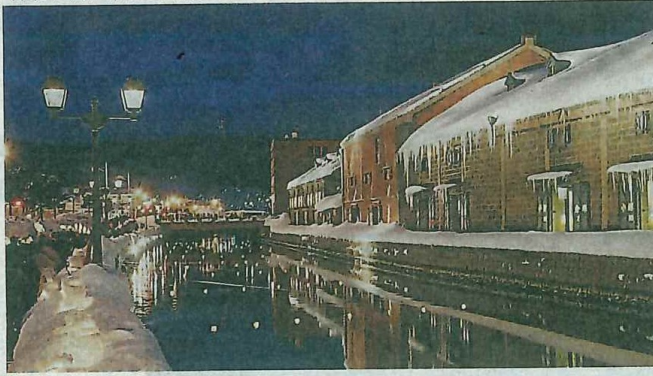
富山県高岡市は、鋳物製品の産地であり、二シシ釜などが北前船で各地に運ばれた。小樽市鶴御殿内の二シシ釜は高岡の職人が小樽に派遣され製造した。高岡市内の伏木北前船資料館には多数の二シシ釜が展示されている。伏木は芥川賞作家堀田香穂の出身地で、堀田家は伏木を代表する回船問屋であった。地元の米や北海道魚肥を取り扱い、取引先の約6割が北海道で、そのうち約8割を古平と小樽で占めるなど後志地域と関わりが深い。

富山市の若狭地区は北前船で繁栄した町並みが今も息づく。この地区にある回船問屋の森家を訪ね、内部を見学した。この家の当主で、北前船主の森正太郎は第四十七銀行の頭取を務め、早くから北海道に進出し、小樽支店を開設した。「五六北前船主」の一人、馬場家は「銀行の監査役を務めた。両行とも北陸銀行の前身である。

北前船寄港地への旅は、北海道のルーツをたどりながら、各地の食、風光明媚な港町を満喫できる魅力がある。続編が来年も企画されているとのこと、ぜひ参加してみたい。

富山市内にある北前船回船問屋の森家で、担当者の解説を聞く参加者。北前船の縮尺模型が展示されている

保存運動で観光名所となった小樽運河＝小樽市提供

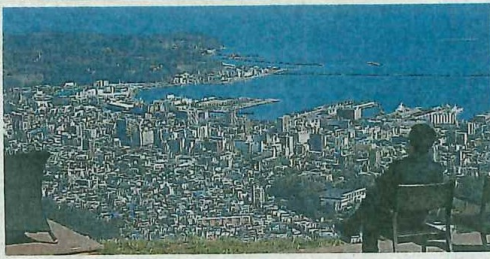


「民」が創った小樽 日本遺産挑む

「単独認定」候補地に選定

小樽市が3件目となる「日本遺産」の認定に向けて動き始めた。今回のタイトルは「北海道の『心臓』と呼ばれたまち・小樽」と呼ばれたまち・小樽と「民の力」で創られ蘇った北の商都。過去2回は他都市と共同だったが、今回は単独での挑戦だ。7月に候補地域に選ばれ、3年後の登録を目指す。観光客数が伸び悩むなか、小樽の新たな魅力発信のチャンスとして期待がかかる。

日本遺産は地域の歴史や、それを構成する文化財などから仕立てた「ストーリー」をもとに文化庁が認定する。複数の市町村で構成する「シリアル型」と、一つの自治体による「地域型」がある。



天狗山からの眺望＝小樽市

が紡いだ異空間。北前船寄港地・船主集落、19年度に「本邦国策を北海道に観よー北の産業革命『炭鉄港』」というタイトルで、それぞれ日本遺産に認定されている。

ただ、「北前船」を構成する自治体は道内外の計48市町に上る。「炭鉄港」も道内の計12市町が加わる。観光地として有名な小樽といえども、これだけ多くの自治体が集まると埋没しかねない。

3度目は再生史

今回の挑戦にあたり、市は「北前船」を小樽の前半史、「炭鉄港」を繁栄史とし、新たな「北海道の『心臓』と呼ばれたまち・小樽」を「再生史」と位置づけた。「北海道の心臓」とは、活況に沸き返っていた

街を、ゆかりのプロレタリア作家小林多喜二が表現した言葉だ。

ストーリーでは、小樽を「未来を夢見た人々や資本家の『民の力』でまちを作り上げた」と説明。だが、高度成長期以降は衰退し、その後は小樽運河の保存運動など「民の力」で観光都市として再生したとつづっている。

魅力発信に期待

文化庁は今年7月、小樽市のほか千葉県（富津市、鋸南町）、京都市を2024

年の認定に向けた候補地域に選んだ。全国からの申請は20件あったため、狭き門をくぐり抜けた形だ。市観光振興室で日本遺産を担当する田中洋之さんは「小樽の魅力をより伝えやすくするチャンスがきた」と話す。

単独での認定を狙う背景には観光客の減少がある。1999年度にはピークの約97.3万人に達したが、その後は減少傾向で、2019年度は約69.9万人に。さらに新型コロナウイルスの影響を受けた昨年度は約26.0万人まで減少。観光業界からは悲鳴が上がっている。

候補地域に選ばれたことで、今年度は文化庁から1300万円の補助金が出る。市はその大部分を、日本遺産のテーマでも掲げた「民の力」の育成に注ぐ。

ストーリーをもとにした事業や商品展開の助言をするプロデューサーや、小樽の歴史を観光客に楽しく伝えられるガイドを育てていく考えだ。

（鈴木剛志）